

フランス領インドシナのゴム農園労働者に関する史料集成 ～それは、「クーリー文書」との出会いから始まった～

高田 洋子

1. はじめに

周知の通り、19 世紀末のインドシナ半島東部は、欧州の大国フランスの植民地統治下に置かれた。近代フランス国家は、「文明化の使命」という植民地支配の正当化のためのイデオロギーを掲げて、仏領インドシナ連邦を創出し、それをフランス帝国の一部に組み入れた。それは現在のベトナム、ラオス、カンボジアを含む広大な領域であった。

植民地支配者たちは、30 年近くを要したインドシナの軍事的平定が一段落すると、統治の要となる植民地国家の首都をハノイに定めた。そして各地に省区とその中心都市を建設し、それらを道路・鉄道・空路で結んで軍事・官僚機構を末端まで配置した。このような装置の建設に加えて、植民地の開発には、相当の労働力が必要である。仏領インドシナは北アフリカなどのフランス植民地とは異なり、フランス人の入植植民地ではなかった。また農園生産のための労働力をインドや中国から大量に投入した英領マラヤや海峡植民地とも異なった。植民地政府は必要な労働力をインドシナ植民地の内部から調達することを望んだ。本国とは比べものにならない低賃金労働力を開発に投入する方法、インドシナの労働者募集のシステムを植民地政府はフランス資本の要請に応じて整備したのである。

私は 40 歳を超えた頃に、ベトナム戦争後の日本人初のベトナム調査（ベトナム史研究者らの学術調査）団の一員として、北部紅河デルタ農村地帯の踏査及びハノイのベトナム国家第一公文書館所蔵の史料調査に参加した（旧文部省の科研費補助金：研究代表者 桃木至朗、1993-1995 年）。大学院時代からずっと文献でしか知らなかった現地に行くまでに、研究開始から 20

年近くかかったのである。今の若い研究者には考えられないことだろう。これは長期にわたり国際紛争の地であったベトナムを研究対象に選んだ者にとって、ひとつの大きな試練だった。

2. 「クーリー文書」との出会い、価値

調査団の一員として、1995 年に公文書館で植民地文書の史料調査を行っていた際に、私は ND-M のコートに分類されたカードボックスに、植民地の経営と開発のために募集された人びとに関する史料が大量に残っていることに気づいた。それらは、植民者が必要とするさまざまな労働力が、ナムディン省政府の認可の下で供給されていたことを示すものであった。278 枚のカード（厚紙で束ねられたファイル群 Dossier の各タイトルを示している）を繰っていくうちに、そこに残された行政文書は、(1) インドシナ各地で必要とされた労働力のナムディン省での調達に関するもの、(2) フランス系の会社にクーリー（肉体労働者）として雇用された人びとの契約書および彼らの目的地への移送に関するもの、(3) その他、の 3 つに大きく分けられる。

ナムディン省は、紅河デルタの右岸河口に位置している。ベトナム民族揺籃の地である紅河デルタは、典型的な稲作農村地帯であり、世界的にも人口稠密な地域である。なかでもナムディン省には、植民地期に 1 平方キロメートルあたり 1000 ～ 2000 人を超す程の人口密度の高い村が多かった。植民地政府は、そこをインドシナ植民地開発の重要な労働力供給源とみていた。ND-M の文書は、植民地開発のための労働者がどのように集められていたのかを示し、地方政府の関与も含めた労働力調達・募集システムを探求するには最適の原史料であると思われる。

た。この分野の本格的な研究の第一級史料であることを、確信したのである。

ND-M のファイルで最も多いのが上記の (2) に分類される労働契約に関するものである。その「クーリー文書」には、村落で植民地政府の許可を得て斡旋・差配する者たちは誰か、人びとはなぜ募集に応じ、会社と契約を結んだのか等々の具体的な情報が詰まっていた。ハイフォン港から渡航船に乗る直前に作成された契約書には、同意した農民のフルネーム、年齢、性別、身長・体重、出身県・出身村落名、同伴者の有無、親族関係、医者による健康状態が係官によって手書きされ、本人の指紋が押されていた。その他リクルーターの氏名、差配人と会社の繋がり、移送先の農園を管轄するベトナム南部（コーチシナ）のフランス人官吏と募集地トンキンのフランス理事長官及びナムディン省長との通信文、許可証等々。1 世紀近くを経て古びた紙は変色し、ペン書きに沿って穴のあくほど傷みの酷い文書もあるが、当時の空気感や添付の写真に映った一人一人の表情、身につけた衣類などから、彼らの息づかいが伝わってくるほどに生々しい史料群なのである。

3. ベトナム史における研究の意味、明らかにできること

契約労働者は、1920 年代——フランス植民地時代最大の開発ブームのピーク時（1926 年～1929 年）に、ベトナム北部（トンキン）、ベトナム中部（アンナン）からコーチシナそしてカンボジアへ、また南太平洋の仏領植民地ニューカレドニア島やニューヘブリデス諸島に向けて、鉄道及び道路敷設、農園や鉱山の開設など、さまざまな植民地建設と開発の為に投入された。その中で最も多数を占めたのが、コーチシナとカンボジアの天然ゴム農園の労働者である。彼らは、クーリーとして3年間の労働契約を結んで農園会社に雇用されたが、開発初期の頃の彼らの境遇は、実に悲惨であった事が知られている。僅かの前金をもらってふるさとの村を離れた彼らは、過酷な未開発地の労働に耐えきれず脱走し、けがや不慮の事故により、そし

てマラリア等の熱帯病に罹って、亡くなったケースが多い。然しその一方で、大農園には1930年以降に激しい労働運動が芽吹いて、資本家や植民地政府を震撼させた。ゴム農園は後の共産主義運動家たちの初期の訓練の場となり、多数の農園労働者たちがその影響を受けたとされている。

これまで仏領期の労働者に関する史料は、独立後にベトナム共産党政府が植民地解放闘争に従事した人びとの体験を記録させた自叙伝やメモワール類しかなかった。その意味で、より客観的で多様なクーリーについての情報の詰まった ND-M 文書の重要性は疑いようがない。これらは当時のクーリーとその募集に関する、唯一の価値ある歴史資料であるにもかかわらず、これまでその存在は知られていなかった。これらの史料を分析することを通して、仏領インドシナにおけるゴム農園開発の労働者募集の実態と構造、そこから見えてくるフランス支配の特徴、そして社会の底辺でフランス資本と対峙したベトナム人の具体的な姿を明らかにできるのではないかと考えている。

4. 公文書館での史料収集と集成

私は、出会った史料の希少性と価値に注目し、今日までそれらの収集を続けてきた。勤務校の仕事の合間を縫って訪越し、何度も文書館に足を運んだ。とはいえ、1990年代にはまだ外国人の公文書館での史料の閲覧そのものが難しかった。史料は国家機関の厳しい管理下に置かれていた。当時は、有力な人の推薦を得て初めて公文書館への入館が許されていたし、所蔵する歴史資料はおいそれと外国人研究者に複写を許可していなかったのである。

このような状況もあって、1995年からの数年間、私は史料を筆写しながら内容の理解に努め、傾向を把握する作業を少しずつ進めることしかできなかった。ところが2010年3月に赴いた時には、新公文書館のシステムに改められていて乗船者名簿を含む1300枚以上の複写が許可された。さらに2017年3月と2019年3月には、閲覧しながら自分のデジタルカメラで史

料を写し、後で頁数を申告して料金を支払う方式を認められた。その結果、ようやく労働契約書についてその全て（約 7000 枚）を収集することができた。

次に、こうして時間をかけて集めた史料から、労働者個人のデータ（一人につき 20 項目）の一つ一つを手作業で読み取って一覧表に取り纏める作業を開始した。これには労働契約書と乗船者名簿の 2 方向からの集成を行うことにした。現在は労働契約書のデータの一覧表作りの段階にあるが、最後はこれらをパソコンに入力して出来るだけ正確なデータベース化を完成させるつもりだ。

乗船者名簿については、2009 年度長戸路学園プロジェクト研究（敬愛大学）の助成を得て、パソコン上の入力作業を終えた。その成果は『仏領期ベトナム・ナムディン省諸村落の契約労働者（クーリー）募集に関する史料集成 1927-1929 年データベース』（敬愛大学高田洋子研究室 2011 年）に収めた。乗船者名簿の多くも手書きの文書である。一つ一つの情報をコンピュータ入力するのは、気の遠くなるほど膨大な作業であった。それでとりあえずは、氏名、身分証番号、性別、年齢、県名、村落名を入力して取り纏めた。これらは ND-M 文書の一部情報に過ぎず、乗船日、農園会社名、リクルーターの氏名などは未集成であり、中途経過をみるためのものではないが、ファイル番号順に、入力情報を基礎データとして全て掲載した。後半には、乗船名簿の基礎データを統合し、出身の県別に仕分けしたものを掲載している。各県ごとに村落のアルファベット順に並べ替えた表も掲載した。

乗船者名簿のデータベースから、ナムディン省で行われたクーリー募集の概要が見えてきた。770 数か村の 6 割以上の村で募集が行われていたことが判明し、一つの村で一度に数百人規模の青年男女を送り出した事例が特定できた。

5. 現地調査

文書館での史料収集に加えて、私が重視する

のは現地調査である。史料から読み取ったことを確かめるために、現地を訪れることは不可欠と考えてきた。2006 年 9 月に、私は紅河の河口、トンキン湾に面したナムディン省のハイハウ県を訪れた。それはハイハウ県がクーリーの出身地として目立つ県であり、私が最も気になる地域だったからだ。土地が希少な紅河デルタでは、今でも海浜の浅瀬を水田化していく粘り強い努力が続けられていた。稲は多少の塩分にも耐えて生育できる植物である。ハイハウ県にはメコンデルタの農村にも似た新開村の趣が感じられた。

この年には、ベトナム南部（旧コーチシナ）のカンボジア国境地帯にあった農園の痕跡を求めて、ピンフックおよびピンズオン両省も訪れた。クーリーたちが原生林を伐採して開拓した旧ミシュラン農園の地を見たかったからだ。現在もタイヤメーカーとして世界的に有名なフランスのミシュラン会社は、1920 年代後半、インドシナに 2 つの大農園を開設した。タイヤの原料である天然ゴムを自前で調達するためだ。ミシュラン農園で働いたナムディン省出身のクーリーは多い。クーリーたちは農園を「この世の地獄」と呼んでいたという。農園は、ベトナム戦争後に北部からベトナム人労働者を再び受け入れて、存続していた。しかも、モータリゼーションが進む中国市場に向けた天然ゴム生産地帯は丘陵地がどこまでも続いていた。私は往時のクーリー宿舎跡を見学し、仏領期に働いた人びとを探しては対面を申し出た。彼らの話は断片的ではあったが、当時を彷彿とさせるものが私の中に残った。

先述の中間的データベースの分析によって、多数の契約労働者の出身村を特定できたことを踏まえ、そうした村を訪問し、村落社会の状況や農園に行った親族を持つ人たちへのインタビューも行った。2015 年春の、ヴァン県 2 村の調査である。2 つの村には紅河デルタ農村の強力な自治組織の伝統が今も残っていて、幹部たちは各集落の住人たちを数世代に遡ってよく知っていた。仏領期の乗船者名簿から抜き出したその村出身のクーリーの氏名一覧を私が見せると、「(その人は)、〇〇集落の〇〇さんとこ

ろの爺さんだ。云々、、、。」とワイワイ騒ぎ始めた。幹部の一人は、その名は自分の曾祖父だと叫んで私を驚かせた。村ではフランスの農園に行った人びとのことを自分たちの村の歴史の一部として共有し、残された家族のこと、帰村した元クーリーがその後どう生きたかを語り継いでいることが分かった。それは、ほんの一例に過ぎない。歴史研究においても、現地社会から得られるものは大きい。外国研究であればなおのことである。

6. おわりに

最後に一言。往時の行政文書は歴史研究の貴重な資料となり得るが、これは曲者でもある。歴史の中で肝心なことは、実は文書として残らない（残さない？）のではないだろうか。だから安易に史料に依存してはいけない。残すか残さないかの選択が行政官によって決められた可能性を忘れるわけにはいかない。なぜその文書

が残っているのかを考えてみる必要がある。史料から何を読み取るかは、読み手の状況把握の深さにかかっている。幅広く史料を探り、全体状況を見通す目を日頃から鍛えておかななくてはならない。

目下の私は、契約書に添付された100年前の小さな写真を見ながら、これからクーリーを体験することになる、その人と対話する気持ちで、データの抽出を続けている。単調な作業であっても、それには尽きぬ人間探求の喜びが伴う。彼らは歴史に踏みつぶされただけではない。多くは辛酸をなめても、自分の人生を生き抜いた人びとなのである。

このようなことに喜びを感じる自分を振り返れば、研究は「最も抑圧された人びとの側の視点から」という津田の大学院時代に学んだことが基礎となっていることに気づかされる。

ゴールに到着する日を夢見て、古亀の歩みは今も続いている。

(高田 洋子*、敬愛大学)

*主な単著『メコンデルタの大土地所有 無主の土地から多民族社会へ フランス植民地主義の80年』京都大学東南アジア研究所 地域研究叢書 27、京都大学学術出版会、2014年。

『メコンデルタ フランス時代の記憶』新宿書房、2009年。

ゴム農園生産に関しては、「フランス植民地インドシナのゴム農園における労働問題——1920年代末のある契約労働者の体験を中心に——」『総合研究』（津田塾大学国際関係研究所）第2号、1988年。

「仏領インドシナのゴム農園開発と労働力—紅河デルタ農村における契約苦力の「募集」を中心に(1)(2)」『敬愛大学国際研究』第29,31号、2016年、2018年。